

湾人の五割増。仕事から帰ってきた父が、植民地への差別待遇に不平を漏らし、時には日本人を犬呼ばわりしていることも知っていた。しかし敏生ら子供たちにとっては、日本時代に履けた靴が国民政府が来てから履けなくなったことの方がよっぽど衝撃的だった。

台湾人はがまん強い。こうして大人も子供も、新しい環境に慣れようと必死に努めていた。その矢先に起こったのが二二八事件。民国三六年（一九四七年）春のことだった。

敏生の印象では、事件発生当初は台湾人が外省人をやっつけていた。地下に潜伏した台湾人を政府当局が拘引しはじめたのは三月下旬以降。恐怖の日々が一ヶ月前後も続いた。

平静を取り戻したあとも、ぎくしゃくした雰囲気は残り、白色テロは処々に見え隠れしていたが、国外に留まるか投獄された「言うことを聞かない連中」以外は、政治的なタブーにさえ触れなければ衣食に困らないと悟って、現実的な「錢途」に邁進することとなった。台湾経済はこうして飛躍を始める。

エピソード

自称「愉快の化身」。林敏生の人生はenjoy everything。「憂い」とは生涯無縁の彼にとって、思い出の一つ一つは喜びで彩られている。還暦を迎えた今も、彼の口から怨み事が聞かれることはない。

普通の人なら苦痛でしかない経験も、彼が語れば微笑ましいエピソードになってしまふのである。

建国中学入学早々、原因不明の黄疸を患ったことがある。両親はそれこそ東奔西走。医者に薬に滋養強壯にと、あらゆる手を尽くして息子の世話をやくのだが、当の敏生はといえば、いつになく優しい母親の姿と、肉スープつきの特別メニューに痛みもどこへやらで、「病気になるのも悪くないな。」などと、ひそかに喜んでいたほどだ。

病気のせいで学期末試験に出られなかった敏生には、夏休みの追試が待っていたが、のんきな彼は悠然と気にかける様子もない。心配した家人が学校に問い合わせると、試験は翌日。一家騒然とする中、敏生がどんな慌てぶりを示したのか、どうやって試験の準備をしたのか、今となっては定かでないが、結果はめでたく合格。おかげで中学は無事三年で卒業。不名誉な記録は残らなかった。

社交的な敏生は兄弟きつての子供外交官。家に来客があると、他の兄弟はみな部屋に隠れて遊んでいるのに、敏生だけは母親にべったり。客間で来客の相手をする。「大人の話はとても面白い。」というのがその理由。敏生の外交資質を見抜いていた母親は、当時台湾の民間に流行していた「頼母子講」にも、ちよくちよく敏生を派遣した。

敏生はしかし活発なだけの子供ではなかった。

下の姉は笑いながら、「連座事件」をこう証言する。「兄弟同士の争い事で母親に叱られると、真っ先に罰を逃れるのはいつも敏生。他の兄弟たちは、それぞれの言い分が通らずふくれっ面しているのに、敏生だけは茶目つけたっぷり。大仰なしぐさで謝ってしまう。これには母親も笑いを我慢できず、叱る気も失せて、結局、敏生は無罪放免ということになる。」

母親に楯突いたところで何の得もない。敏生の理由はいたって簡単である。

財政管理、経営の面では、こんなエピソードがある。世情不安の中、子沢山の林家には毎日、仕事
が山積みであったから、子供たちにも交替で家事の当番が回ってくる。中でも年長のものは、一週間
交替で買い物を担当することになっていたのだが、敏生が担当する一週間は、食卓に上る料理が目立
って貧弱になる。何のことはない。まだ幼い敏生には値切り方が分からず、高い買い物をしてしま
うくせに、「労働報酬」だけは人並みに取ろうとするから、自然、食膳の質にしわ寄せが来るわけであ
る。

下の姉から見ると敏生はお茶目なはずらっ子だが、長兄永生は、この弟の勇氣ある一面を知つて
いる。上の姉がくやしい思いをしている時、身を挺して不平を代弁するのは敏生だったし、主家の旦那
が忙しい父親をいよいよにこき使うのを見て、不満をぶつけるのも敏生だった。主家大事のあの時
代に、「いつまでも旦那でいられると思うな。」と、敏生の気炎は相当なものだった。

愉快な少年時代にも「不慮」の事件はあった。小学校三年の頃、放課後の相撲が同級生の間で流行
っていたが、敏生は、日本人の同級生を怪我させてしまったことがある。足の骨を折る大怪我だった
から、子供にとっては超弩級の大事件。敏生は毎日、見舞に行つて同級生を気づかったが、両親には
終始黙っていた。長兄が弟の境遇に同情して秘密を守ってくれたので、事態は隠密裏に解決できるも
のと思われたが、それも束の間、一週間も経つのに親の姿が見えないのを怪しんだ担任の瀬戸先生が、
委細したためた手紙を永生に託したのである。事ここに至り弟をかばい切れなくなって事件は露見。
兄弟二人ともども厳しい叱責を受けたのは言うまでもない。敏生は父親に連れられ同級生の家へ謝罪
にでかけた。びくびくしていた敏生だが、「子供の遊びに怪我はつきもの。今回はたまたまうちの子
が怪我しただけ。」と逆に慰められた。この明快な態度に敏生は、子供ながら深い感銘を受けた。